

横須賀市吉井城山第一貝塚調査概報（一）

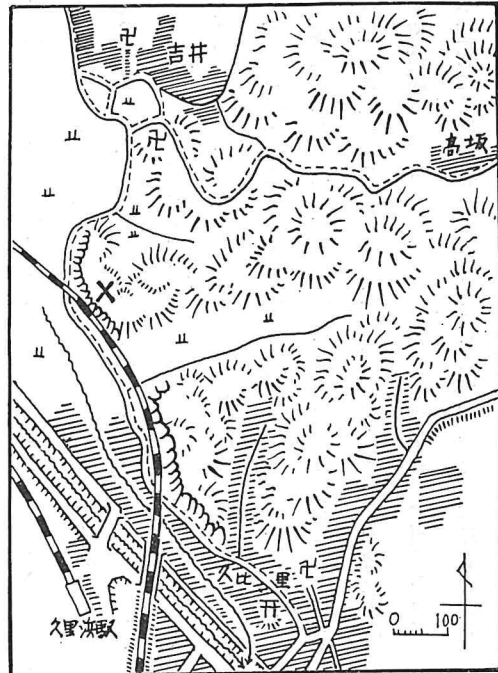
赤 星 直 忠

一、前 が き

吉井城山には三貝塚があり、茅山式・関山式・加曾利E式などの土器片が表面に散在している。我々が三浦半島の早期縄文式土器について研究を進める上で、吉井城山貝塚が持つ意義は極めて重大であると考えていたが種々の事情から大々的に発掘調査をすることが出来ずに今日に至った。早期縄文式土器の編年研究が進んで茅山式土器が野島式・鶴ヶ島台式・茅山下層式・茅山上層式と四分される今日においては尚内容の不明確な茅山上層式土器の研究に重点をおく必要から、その資料を多量に包含するとみられる吉井城山貝塚の調査がどうしても行なわれねばならないことになった。横須賀市博物館人文科学研究室昭和三十五年度研究として吉井城山貝塚の発掘調査が計画され、地主との交渉を進めている中、京浜急行電鉄株式会社車輛工場用地として吉井城山西方水田を埋立て、その土取場としてこの城山が切崩されることになったというのを聞かされた。従来発掘調査することに対してあまり賛成しなかった地主が案外容易に承諾したのは、切崩されてしまうことがわかっていたからであった。城山にある三貝塚中、第一貝塚は齋藤房吉氏所有地から角井慶蔵氏所有地にかけて、第二貝塚は齋藤房吉氏所有地から臼井光之助氏所有地にかけて、第三貝塚は角井慶蔵氏所有地に拡がっていた。これらの地主の承諾を得たのは九月八日。京浜急行電鉄株式会社（第一貝塚の一部と第二貝塚の工事開始、十二月末日までに第一貝塚の大半である角井慶蔵氏所有地を切りとり、三月頃までに齋藤房吉氏所有地（第一貝塚の一部と第二貝塚の大部分）を切りとることになっているとのことであったので、急ぎ県教育委員会と打合せ、九月二十七日発掘届を提出するとともに文化財保護委員会から緊急発掘の許しを得た。京浜急行電鉄株式会社および工事受負の鹿島建設株式会社の理解により、工事はなるべく貝塚部分を最後に切崩すこととし、切崩工事が足もとに達するぎりぎりまで調査をすることを許された。博物館が貝塚調査に支出し得る費用は極めて少額であってとうてい今回の大調査を行なうことのできないものであったから、横須賀考古学会が全面的にこれを援助することになった。十月十六日横須賀考古学会の手によって測量を終了。二十日から発掘開始。しかるに貝塚はその東方畑地（齋藤房吉氏所有地）の住地から西方の谷間にむかって形成された

ものであり、貝層はこの谷に向って急傾斜で形成され、最も厚い部分では三mをこえるものであることがわかり、調査は困難を極めた。横須賀考古学会員諸君は可能のかぎり多数出て調査を続行したが予定の十二月までにその大部分を調査し終ることは不可能であることが明らかになった。この間羽根田博物館長は市当局を説き、調査のための追加予算十万円を得ることができた。調査進捗中今まで切崩しに同意しなかった西方突出部地主齋藤梅吉氏が同意したので、切崩し工事はこの部分に向って進められることになったため、我々が調査中の貝塚の部分は最後に切崩すこととなり、更に数ヶ月間調査を続行することが可能となった。かくて翌昭和三十六年三月十九日ブルドーザーによって全く貝塚が切りとられて失なわれるまで足かけ六ヶ月、実働七五日、延人員五八二名。発掘面積一九〇平方m。約三分の一の部分は深さ四mに達し、二mの厚さを有する茅山上層式土器包含の貝層の上に関山式土器を主とする五〇cmの土層を覆い、更にその上に三〇cm内外の加曾利E式土器の貝層を覆うものであった。工事予定の変更により、第二貝塚および第三貝塚は切崩されないことになったのはまことにさいわいである。調査中途において貝塚発掘記事がしばしば新聞紙に報道されたため、調査を休んだ日に遠近の中学生がトレンチの壁を崩すことが度々あり、撮影のため壁面に露出させてある土器片や獣骨が崩しとられ、或は撮影のため整えられた壁面に大穴があげられるなど、困ったことが度々あった。本調査中毎日新聞社は特に航空機を出され、吉井城山を四方から空中撮影しその写真を提供された。ここに厚く謝意を表す。また本調査を終始援助された横須賀考古学会員・各大学学生諸君・同OB諸君に対しても厚く感謝の意を表す。

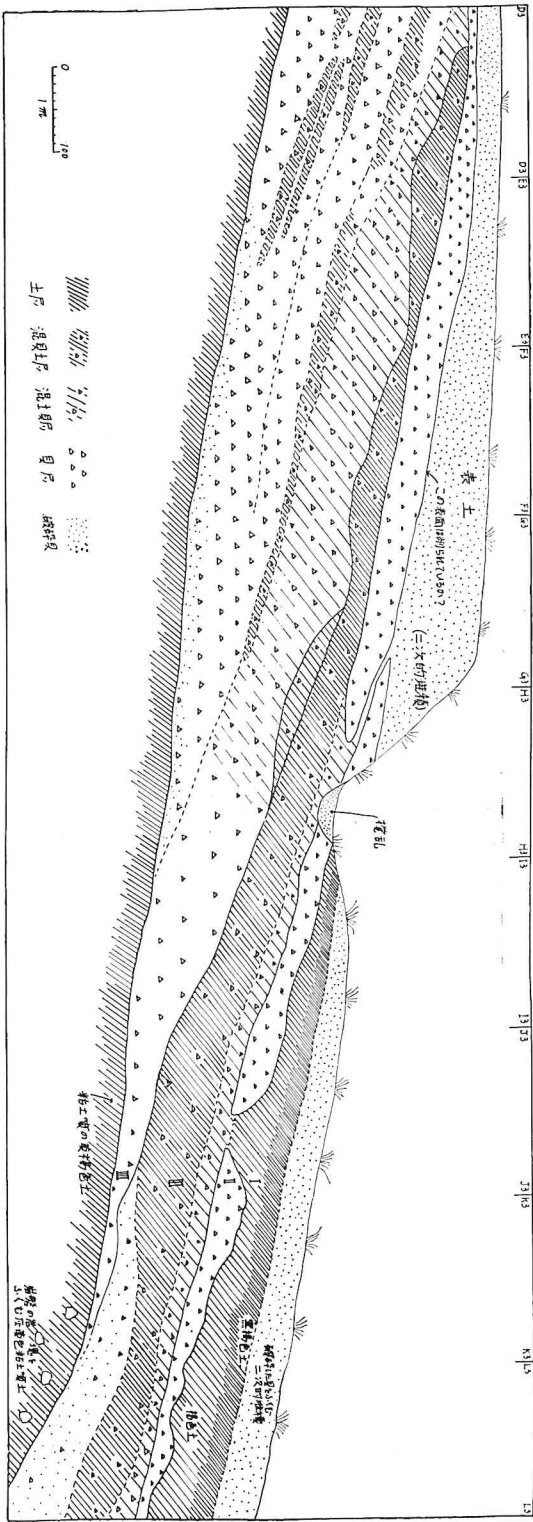
調査後遺物の水洗および整理は横須賀考古学会諸君の援助によって昭和三十六年四月以来引つづいて行なわれた。何しろ土器片の量だけでも林檎箱四〇箱はあるというほどである。かくて全遺物を洗い終るだけで三十七年一月までかかったのである。土器の整理研究は主として岡本勇氏が、骨・角・牙・貝器の研究は神沢勇一氏が、その他の資料は赤星が分担した。洗い終って今回報告を書くことになった下部貝層の全土器破片中か



第一図 吉井城山所在地



第一図版 北から見た吉井城山 (毎日新聞社提供)



第二図版 吉井城山第一只塚3トレンチ西壁 具層断面

ら資料として役立つ土器片を選別するにあたって、数えたところ約二万五千片におよんだのをみてもいかに大量であるかがわかるであろう。

今回報告書を書くのは下部貝層以下の資料についてであり、全資料を洗い終るのに丸十ヶ月を費してしまったので、この報告を執筆することは時間的に実際には無理であることは万々わかっていたが、どうしても下部貝層に関してだけでも本年度出版の横須賀市博物館人文科学研究所報告第六号にのせねばならぬとして強行したものである。縄文前期遺物を包含する中間土層および縄文中期遺物を包含する上部貝層、並びにこれを覆う上部土層に関することは来年度出版される第七号にのせる予定である。これによって発掘に対しての一応の責をふさぐつもりである。我々が縄文早期の土器編年中に茅山式土器を提示して以来、茅山式土器の細分につとめた甲斐があつて、野島式・鶴ヶ島台式・茅山下層式・茅山上層式の編年を明らかにした。しかし茅山上層式の文化内容については未だ充分明かにすることができなかったのを今回の下部貝層資料の研究によって極めて詳細に学界に報ずることができたことになったものである。

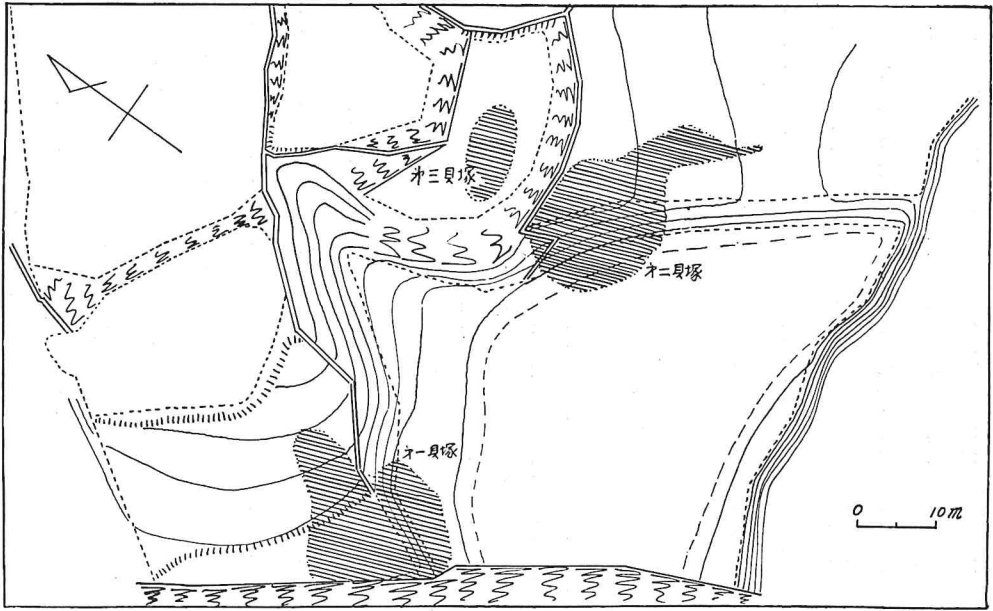
参加者 担当 赤星直忠

援助

横須賀考古学会（岡本 勇・神沢勇一・浜田勘太・西条好晴・山中信夫・斎藤彦司・小川裕久・田中すぎ・塚田明治・金子皓彦・橋口尙武・岩本義雄・橋本良男・佐藤英雄・鍋島愛幸・山田政雄・村田慶之輔・県立横須賀高等学校歴史研究部生徒・県立三崎高等学校郷土部生徒・横須賀市立工業高等学校郷土研究部生徒・逗子開成学園地歴部生徒・鎌倉学園考古部生徒）、立教大学・明治大学・国学院大学・日本大学・慶応大学
学生及OB諸君、湘南学園・横須賀市立第一高等学校生徒、麻生優、金子浩昌・他数氏

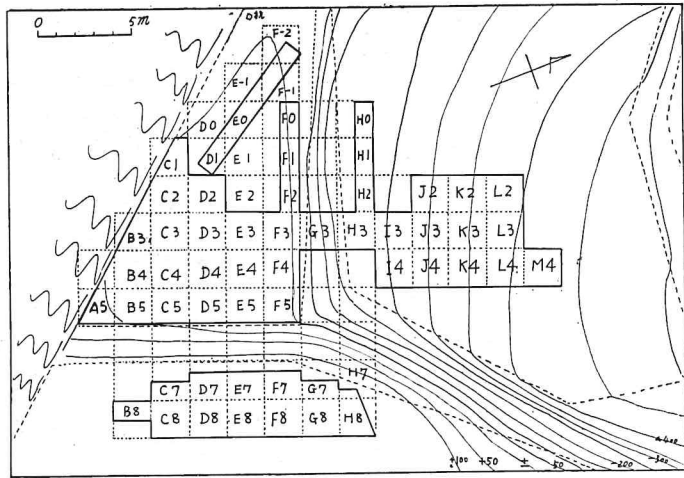
二、所在地

本貝塚は神奈川県横須賀市吉井町台崎にある。国鉄横須賀線久里浜駅の北方五〇〇m。久里浜駅のある附近一帯の低地は三〇〇年以前まで海水の侵入していた入江であったが万治年間（一六五八一—一六六〇）砂村新左エ門が海水の侵入を防ぎ、新田として開発した（内川新田）ところであり、その中を、昭和十八年横須賀駅から久里浜駅まで国鉄が、また湘南久里浜駅まで京浜急行電鉄が延長するにおよんで附近一帯が急速に開発され、特に終戦後は住宅地として発展、更に最近にはこれにつづく西方一帯地域が工業地帯として計画せられるに至った。この低地（現在では多く水田）中に北方の丘陵から二〇〇mも西南方に突出した細長い半島状地形が小字台崎であり、上面の大部分が台状畑地であるため、台崎の名がつけられたものと考えられる。この小半島は東方の標高六〇m余の丘陵地裾から西南方へのびた低い一本の支尾根であり、その先端は北西方に彎曲し



第 2 図 吉井城山貝塚の分布

て廢手状をなしていた。その地形は新田開發以前は海中に突出する小半島であったから、古代人は早くからこの地を生活の場所として選定した。生活地として最も必要な湧水がこの小半島中部の南北両裾にある。現在この半島形の中部北裾に存する農家は北部湧水を用永として住みついたものであり、かつてこの地が三浦氏の城地（平安時代）であったのも、防ぐに易く攻むるに難い地形と豊富な湧水があったためと考えられる。台崎の名称を以て呼ばれたこの地形は三浦氏が城地（怒田城）として自然地形を改変して以後のものであり、三浦氏滅亡後は農地としてその表面を耕作されつづけ、今回の切崩以前には昭和十八年京浜急行電鉄敷設工事のため、その先端から西北端にわたって切りとられただけで、尚旧地形を充分残していた。この地の形態をのべることは三浦氏の城郭である怒田城（註一）の構造をのべることと一致する。その概略をのべると次の如くである。源平盛衰記は怒田城を「怒田の城は三方は石山高うして馬も人も通い難き悪所なり。一方は海口に道一つ開けたれば善き兵二百人有らばたとひ敵何万騎寄すともたやすく攻め落すべからず」と記している。それはまことによく海中に突出した小半島を以て城地としていたことを物語っている。平安期の城は天然の要害地を選んで邸館を営み、これに僅かに人工を加え、万一に備えたものであり、多くは人工部分をあまり加えていないものであるが、本城跡はかなり多くの人工を加えたものであることが残存地形から判断される。この小半島形が北方丘陵から西南方に突出する部分の基部は長さ二〇m余におよぶことに陸橋状地形をなし、その先が広くふくれているのである。この陸橋状地形もあるいは自然のままではなく、城郭構造の一部として当初



第3図 吉井城山第一貝塚発掘区

に自然地形に手を加えてこのようにしたものであるかも知れないが大体は当初からこれに近いものであったろう。この陸橋部をわたると自然地形の低丘陵となる。この低丘部分を越えようと一帯の平坦部分が拡がる。この平坦部分とその西南にある先端部分の平坦地との間が巾広く掘り切られ、この部分が約2m低い平坦地となっている。先端平坦部の西北側にある西方高地部分との間がまた掘り切られた形になっており、この部分も平坦である。西方高地部分は東北に長く伸び、その上部は大体平らであり、一部分が畑地である外は雑木林になっていた。この高地部分と前述の中段を掘り切られている平坦地との間は、先端部を最高所として次第に北東に低くなり、谷を形成している。谷の出口でその外にある水田より僅に高い畑地となっている。この部分の東側山裾に農家があり、その側に湧水がある。現在の台崎はこのような地形であり、先端平坦部分の標高は二〇m。この平坦地の西寄りに第一貝塚、北寄りに第二貝塚があり、第二貝塚の西北の低い畑地に第三貝塚がある。第二貝塚の北方は掘り切られた低い平坦部で、掘切りを越えた東北側の高い部分の平坦地の畑には縄文中期土器片が散在し、第一貝塚表面には縄文早期・前期・中期の土器片が散在し、第二貝塚表面には縄文早期の土器片が散在、第三貝塚およびそれにつづく下方の畑地には縄文早期・前期・中期土器片が散在する。すなわち台崎が縄文早期以後中期にわたって住居地に選ばれたことがわかる。その他これら一帯の地域には僅かであるが土師器片も散在し、その後も生活地に選ばれたであろうことが推察できる。これらの土師使用者と直接の関係があるかどうかはわからぬが、台崎西南端山腹に横穴古墳三基(昭和十七年電車工事により切崩された。(註2))があり、城跡北方水田を二〇〇m距てた北側丘陵の南面山腹に二基の横穴古墳(註3)が現在する。すなわち台崎は縄文早期以後断続的に住居地となったことがわかる。如何に住みよかったかがわらう。今回発掘調査した貝塚はこの中の第一貝塚である。第一貝塚は先端平坦地の西北寄部分からその西北側の低い畑地にかけて貝殻の広い散布があり、第二貝塚は畑の北寄り部分からその北側の低い畑地にかけて貝殻の散布がある。第三貝塚には貝殻のわずかな散布がある。第三貝塚は昭和十一年その一部を発掘(註4)して層位状況を明らかにした。第



第4図 吉井城山第一貝塚貝層

一貝塚は大正十年及び昭和二十二年その一部を試掘したが第二貝塚は手をつけたことがない。

三、貝塚状況

第一貝塚と第二貝塚のある台崎先端の畑地は大体矩形をなし、東北西の三方に傾斜している。西傾斜面の畑(五七二番)は西方の低い畑(五六八番)との境で高さ二mの切岸になっている。この低い畑はその北側の低い畑(五六七番)との間に一・五mの切岸を作っている。この畑は北方にゆるく傾斜しており、その北方につづく畑は同じくらいの高低差の段々畑になって次第に低くなる。畑表面の貝殻分布は五七二番の南半部から五六八番と五六七番の東半にわたっている。五七二番と五六八番の境になっ

ている高さ二mの切岸下に畑境の線にそって一〇mの基準線を設定し、これを基準として第一貝塚全域を二m方眼に区劃し、発掘区を設定した。南にA・B・C・D・E・F……、東西に8・7・6・5・4……の符号を与え、基準線に接する区は南からB5・C5・D5・E5・F5とした。発掘はB5区―F5区にわたるものからはじめられたが、これによって東側の高い畑からかなりの傾斜をもって西に低くなっている谷間に向かって形成されている貝塚であることが知られた。貝層は谷の傾斜面にそって幾層にも積重ねられたものであるが、東側の畑との境の切岸が作られたときこの部分

の貝層が大きく削りとられていることが明らかになった。次いで B⁵ - F⁵ トレンチに直角方向のトレンチ D⁸・D⁷・D⁵・D⁴・D³・D² が作られること
によって、D⁸を東の末端とし、この部分から次第に西方へ貝層が積重ねられていったことが明らかにされた。D²区西端においては東の畑からつづ
いた下部貝層はその上に混貝土層(四五cm)、その上に巻貝を主とする上部貝層(三〇cm)、さらに上に混貝土層(四〇cm)を覆うようになってい
ることが知られた。後にこれにつづく貝層の状況が明らかにされたがそれによるとD²の西端まで傾斜してきた谷は、ここから急に平らになり、
二mくらい進んだあたりでまた小しのぼり傾斜になり、やがて西方高地の東裾として西方へ急傾斜でのぼるに至るのである。この谷底の傾斜にそ
って下部貝層は形成され、厚さ一mくらいで堆積し、D⁰の西端あたりで急に終る。その先は土器片の包含層となる。この上に約一mの厚さに混土
貝層が覆い、D¹の末端にて急に消滅する。D¹ではその上に、無遺物土層三〇cmくらいがありその上に厚さ三〇cmの混貝土層、その上に厚さ一五cm
の小巻貝を主とする上部貝層があり、やはり急に消滅している。これら混貝土層・混貝土層・上部貝層は何れも谷の最低部にまで達して消滅して
いることが知られた。下部貝層末端の土器包含層は別に西方高地裾から同じ谷間へ西から東へ傾斜する小貝塚末端につづくことがわかった。すな
わち西方高地先端にも同時期に生活者があり、やはりこの谷に向って貝塚を構成していたものであった。しかしこれは小貝塚(西貝塚)にすぎな
い。トレンチはまた、D³を含む南北方向にD³・E³・K³・L³と一八mの長さに作られ、貝層が谷奥からどのように堆積するかが調査された。谷は
北にむかって傾斜し、貝層はこの上の上の北に傾斜していた。下部貝層はD³・E³・F³区において厚さ二mに及び、それよりG³・H³・I³と次第に
厚さを減じ、I³北端にては厚さ五〇cmと減じ、J³北端にては厚さ一五cmとなり、このあたりよりは上に約一五cmの混貝土層(破碎した貝)を覆う
ようになり、ついにK³北端にて消滅する。上を覆っていた混貝土層は厚さをまして五〇cmとなりさらにそのまま傾斜面にそって下っていた。この
下部貝層の上面は決して平らなものでなく、波うっているものであることがわかった。下部貝層を覆う混貝土層は下部貝層の表面の傾斜につれて
傾斜し厚薄一様でないがG³北端あたりから一様に厚さ六〇cmくらいとなるがその下半には貝を混在しなくなる。その表面は大体平らであり、上部
貝層が上の上のっている。上部貝層は大体四〇cmの厚さをもって傾斜につれて堆積し、G³北端にて急に薄くなり消滅するがその延長は厚さ約二〇cm
の混貝土層となつてL³北端にまで達し、さらに北方へつづいているが混貝の量は次第に減じてゆく。G³北端にて上部貝層が急に薄くなって消滅す
るとき、これに代つてこの部分で別の上部貝層bが薄く上に重なり厚さ二〇cm乃至三〇cmで上部貝層aの延長である混貝土層上を覆いL³北端では
厚さ一〇cmに減じ尚北につづいていた。上部貝層を覆う土層はI³南端で二〇cmくらいの厚さであったがJ³北端では四〇cmとなりL³北端では九〇cm
に増していた。この土層の上には四〇cm乃至五〇cmの破碎した貝片を混ざる土層が覆うていた。以上によって第一貝層構成の概要を知ること

ができるであろう。貝塚人は東方の高畑地（五七二番）に生活し、西方の谷に向って廃物を投棄した。廃物の中心であった貝は谷の傾斜面にそって転落した。谷頭においては谷の最低部をこえて幾分向う側の傾斜面にまで達した。貝塚の先端は貝層を失ってからは土器包含層の形でさらに先にまでのびていた。谷の傾斜につれて低い方に貝層は形成されていった。次第に厚さを減じ貝層が消滅してからも土器包含層となつてかなり先の方まで達していることがわかった。貝層上面は決して平らでなく波うっていることが知られた。下部貝層の上に混貝土層が覆っており、その表面は大体平らである。その上に形成された上部貝層も下部貝層と同様な形で形成されていた。下部貝層を構成する貝層は幾重にも重なっているがそれらは厚薄不同。混土の量も不同であり、且つそれらの貝層は何れもレンズ状をなして層々相重なるものであることが明らかである。従つてある巾狭い部分においては上下に重なる幾層かを数えることはできてもその一層を横に長く追求することは下可能で間もなく薄くなつて消滅してしまうのである。下部貝層は東方高地先端の住人によって構成されはじめたからこれに近い部分の貝層は初期の構成であり、次第に谷間に向つて埋めたてられる形で貝塚は厚くなつていった。

下部貝層は最も厚い部分で二mに達したが厚い部分においては下部と中部以上とでは貝の種類や量にいくらかの差異が認められた。東方高地にある初期貝層とそのつづきである西側低畑下部貝層の下部においてはマガキを主とし、その貝も大きいものが多く、特に両手にもつほどの厚く大きい貝殻や、ナガガキを思わせるような長さ二五cmにも達する長型に発達したものがかなりの量混在し、また大型のハイガイや大きいアカニシがかなり目だつて混在していた。しかるに西側低畑においては下部貝層の中期から上になるとハイガイがほとんどみられなくなるし、まれにあつてもあまり大きいものでなくなる。マガキやアカニシも特に大きいものは極めて少なくなつてしまふのである。氣候の変化によつて大型のものや暖海性のハイガイがすまなくなつたとみるか、採集しつくしてしまつたためであるかはわからない。氣候の変化でないとするならば彼らの行動範囲内から大型のものやうまいハイガイが採集しつくされたとみなければならぬ。貝層内には極めて多くの礫が混在し、円礫のままのものもあるが多くの破砕されていた。この多くの礫は彼らの生活になくならない器具であつたからと解される。貝層内には魚骨魚鱗が目だつて多かつた。魚鱗が厚さ五cmくらいの層を形成して二mくらいも長く貝層内にみられる場合がしばしばあつた。魚の中で最も目だつものはマダイ・クロダイである。獣骨ではイノシシの顎骨が目だつて多かつたに反してシカの顎骨が極めて少なく、シカがひどく少ないかの如く感ぜられたが他部分の骨や角はかなり多くみられたから決してシカが少ないのではない。角の中には落角がかなり混在していた。土器はせんに多く含むため極めて碎けやすく大きいままとりだすことは困難であつた。貝層の下部から上部に至るまで出土量に大差なく、すべて茅山上層式に属するものであつたが

これに糟畑式を混在することがあきらかにされた。貝層内から発見される骨角器の状態をみるに東方高畑にある貝層や西方低畑の下部貝層からはほとんど骨角器が発見されていない。それは生活の初期にあって骨角器も少なく、大切に扱われていたためであろう。やがて下部貝層の中層に近づくともかなり検出されだすのである。貝層中の巻貝は割られたものが多く貝の一部が焼けたのが目だつのはつばやきにされるが多かつたためであろう。二枚貝は割れたものが少なく、中には二枚合さったままのものもしばしば検出された。それらはあぶって口をあげさせたり、熱い湯につけて口をあげさせる方法がとられたためと思われる。

四、出土遺物概要

本貝塚出土遺物の量は極めて多いので本稿にその全部を執筆することができないから、主として下部貝層の文化遺物については稿を改め各独立した報告としてのせることにしたからここには概要を記すにとどめる。中間土層及び上部貝層については資料整理未了のため、次回に報告する。

自然遺物——貝について……生活場から両側の谷にむかって貝塚が形成されたことが発掘の結果明らかにされたものであり、従って谷への傾斜にしたがって貝層が形成されていった。生活場に近い部分のものは早く形成されたものできり、貝層は傾斜したまま次第に厚くなっていった。下部貝層の最も厚い部分は2mに及んでいる。貝層中に包含された土器は縄文早期末の茅山上層式であり、下部と上部とにおいて出土する土器に差異を認めることができないから、この貝塚は当初からひきつづいて同一集団の人達によって形成されたものと解することができる。貝塚を形成する貝は大部分がマガキである。これに他の貝が混在するものであり、他の貝が特に集団的に貝層を形成するような部分は認められなかったが貝層の下半分においてはハイガイ・オキシジミ・ハマグリ・カリガネガイ・アカニシ・レイシなどが多少めだつ存在である。それらが貝層下部にあつては何れも大型のものが大部分であることは貝層の項で記した如くであったが貝層の上半部にあつてはハイガイがめだつて減少したばかりでなく、他の貝も出土するものは大きいものは少なく比較的小さいものばかりという変りかたを示した。この変化は貝塚全体を通じてみられたところである。マガキの中に極めて大型のものが混在し、別種のものであるかとみられたがやはりマガキである。この大型のものも貝層の下半分にめだつて混在したが上半分では極めて稀に出土するにすぎなかった。また一見ナガガキであるかとみられる長型のマガキが混在した。これも下半分に混在が顕著であり、上半分ではほとんどみられなかった。このほか、カガミガイ・アサリ・バカガイ・ウチムラサキ・ツメタガイ・サザエ・バイ

・オウヘビガイが全貝層を通じて検出されたが、ハマグリ・アサリ・カガミガイ・ツメタガイなども上半分においてはその量がめだつて減少を示した。アサリの中には横に長くヒメアサリの特大形であるかとみられるような長型のアサリが混在した。ハマグリは下半分においては特に大型のものばかりであったが上半分ではその数も減じ大型のものがめだつて少なくなった。このように同じ貝が下半分で大型であり数もめだつて多かつたに反し、上半分では小型のものが多く数も少なくなったということは彼らの食料採集地域においてそのような大型のものがとりつくされてしまつたということに原因するものであろう。当初大形のもののみ採集しても尚充分であつたから小形のものには目をくることがなかつたがやがて大形のものも少なくなると小形のものも採集せざるを得なくなつたと解する。そしてやがては小形のものも充分には採集することが困難になつたのでこの場所をみすてて次の生活地へ移動したと考へてよからう。上半分においては下半分にみられなかつたアズマニシキのごとき貝まで検出されるに至つてゐることは貝の減少により従来採集しなかつたものまで採集せざるを得なかつたことを意味するものと解したい。サザエは殻の存在するものが極めて少ないのが普通である。本貝塚においても殻の存在するものは少なかつたが蓋は相当量検出されており、それらは下半分においてやはり極めて大型であり、数も多かつた。アワビの殻は小さい断片として検出されることがしばしばあつたが大きい破片として検出されることはなく稀にやや大きい破片が検出されても極めて多く、そのまま採集することは困難であつた。アワビは大きい殻のものが採集されたであろうがその大部分が容器として用いられたと考へられ、破壊しすてられたものも貝層中でぼろぼろになつてしまつたので検出することが困難なのであろう。淡水産の二枚貝として大形のヤマトシジミが数は少ないが全貝層を通じて検出された。貝層の上下を通じてヒダリマキマイ・オオケマイ・マイ・ナミギセルなどがかなり検出されているがそれらはごみすて場に集まつて来たものの遺殻であり、必ずしも食生活に結びつける必要のないものとする。しかしおそらくマイマイも食われていたであらうがマイマイの如き殻の薄いものは食うために殻をおしつぶしてしまつたと解する。アカニシ・テングニシ・ミガキボラなどの貝殻では側面が焼かれて変色したものが多く、また側面が大きく欠けているものが多く検出される。これは焚火中でつぼやきされたものと解される。サザエも多くつぼやきにされたと思はれるが身をだすとき殻が砕かれてしまふものが多く、蓋のみが検出されるであらう。二枚貝は砕かれずそのままの形ですてられているのが普通である。焚火中に入れて口を開かせることのほか、土器中の熱い湯の中に入れて口を開かせる方法がある。土器は胴以下が赤褐色に変色し、いかにも焚火中にたてられていたことを物語るものが多い。火中にたてられ湯がわいてゐる土器の中に入れられた貝は容易に口を開いたはずである。その湯はスープになつたであらう。また火中で熱した円礫をさみ出して水を入れた土器中に投入することによつて熱い湯を作ることを行なわれたであらうことは火中されて表面のはせた円礫がかなり

の数検出されていることでも知ることができる。下部貝層から検出された貝は二枚貝三七種（内、淡水産一種）、巻貝三六種（内、陸産貝四種）計七三種（註10）である。以下その名を列挙する。（◎極めて多。○多。●やや多。△少ない。×まれ。）

二枚貝

- | | | |
|----------|-----------|----------|
| ◎マガキ | △サルボウガイ | ×ベンケイガイ |
| ○ハイガイ | △アカガイ | ×カモメガイ |
| ○オキシジミ | △オキアサリ | ×アズマニシキ |
| ○ハマグリ | △チリボタン | ×マツカゼ |
| ○カリガネエガイ | △クルスガイ | ×オキナマツカゼ |
| ●イタボガキ | △ナミマガシワ | ×セミアサリ |
| ●カガミガイ | △アケガイ | ×キヌタアゲマキ |
| ●オニアサリ | △コベルトフネガイ | ×フジナミ |
| ●アサリ | △ミルクイ | ×シオヤガイ |
| ●バカガイ | △イガイ | ×ヒバリガイ |
| ●マテガイ | △シオフキ | |
| ●ウチムラサキ | △イタヤガイ | △ヤマトシジミ |
| ●オウノガイ | ×サトウガイ | |

巻貝

- | | | |
|------------|-----------|------------|
| ○アカニシ | △イソバシヨウ | ×ヤカドツノガイ |
| ○ツメタガイ | △メガイアワビ | ×キクスズメ |
| ○ツメタガイ(異形) | △オガイアワビ | ×イソニナ |
| ○レイシ | △トコブシ | ×ナガスズカケ |
| ●サザエ | △クマノコガイ | ×ナガニシ |
| ●バイ | △パテイラ | ×コウダカマツムシ |
| ●テングニシ | △コシダカガンガラ | |
| ●オウヘビガイ | △ツノガイ | ●ヒダリマキマイマイ |

- イシダタミ △ ウミニナ
- スガイ × マダカアワビ
- イボニシ × ボウシウボラ
- ベッコウザラ × ベッコウイモ
- △ ミガキボラ × シドロ
- オオケマイマイ
- △ ナミギセル
- × ヒカリギセル

獸魚鳥骨について：：獸魚骨は発掘中出土した全部を採集したがその量は林檎箱一〇個分だったが急いで採集したのとあまりにもろくなってしまったので破壊してしまったもの、折損してしまったものが極めて多かった。しかしすべての資料が採集されたために貝塚に捨てられた骨の状態をみる点で頗るよかった。獸骨はすべて小さく破碎されていた。頭骨のすべてが破碎されていたことは脳液まで吸ってしまったであろうことがうかがわれ、肢骨の全部が碎かれていることは骨のずいまでしゃぶられていたこと、骨片の使用されるものはすべて使用されたことを物語るものであろう。骨片に混じて極めて多量の骨器が検出されたのは、本貝塚が特に多くの骨器を持っていたということではなく、すべての骨片までも採集され、それが細かに観察されて骨器が選び出されたためである。縄文早期文化を示す遺物中に従来採めて僅かの骨角製品しか検出されていないのは、明瞭に骨器として整形されたもののみがとり出されていたためである。今回採集の骨片はさらに検討を加えられることによつてさらに縄文人の意志が加えられた骨片の検出が可能であらう。貝層から採取された骨についての分類結果（註5）を次に記す。

哺乳類：：下部貝層からは獸骨は極めて豊富に出土した。イルカとみられる海獸の脊椎骨がどの層からも出土したにもかかわらず顎骨頭骨は少なく、しかもすべてが碎かれていたし顎骨からは歯がみなぬけおちていた。F 貝層の最下部から大形の海獸歯がかたまつて出たので頭骨の存在を考へ大きく土ごと石膏で固めて採取したが結核歯だけでしかなかった。イノシシの顎骨が極めて多く採取されたに比べてシカの顎骨は断片が少し検出されただけなのでイノシシにくらべてシカがなせ少ないかの疑をもつたが後すべての骨を洗い終つて分類した結果ではイノシシの骨とシカの骨とは大差ないくらいであった。シカの角はかなりの数が採取されたが落角であることの明らかなものと坐骨の接着するものと半々くらいのようである。角中には結節の高く発達したものが二―三みられたがまた角座の益弱な細目の角も一例検出されている。貝層中から採取された小動物中にはタヌキとアナグマが多く、イヌ・サルは期待に反して少なかった。

- ヒト (臼齒・顎骨・頭骨・膊骨)
- ニホンジカ (角・顎骨・歯・肢骨) イノシシ (顎骨・齒牙・肢骨)
- タヌキ (顎骨・肢骨・脊椎骨)

- キツネ (顎骨・肢骨)
- アナグマ (顎骨・肢骨・脊椎骨)
- サル (肢骨)
- イルカ (顎骨・歯・脊椎骨)
- クジラ (骨片)
- トド (歯)
- イヌ (顎骨・歯・肢骨・脊椎骨)
- カワウソ (肢骨)
- ウサギ (顎骨・肩胛骨・肢骨)
- イルカの種類(歯・脊椎骨)
- アシカ (歯・肢骨)

人骨は貝層の各所から獸骨と同じ状態で出土した。貝層は西傾斜し厚2mに及んでいるが貝層最下部から上部にわたる各所から断欠として採集された。それらは埋葬されたとみられる状態のものは一例もなく、顎骨だけが貝層中に発見されしかも多くは完形を保っていない。上膊骨とか胫骨とかの長い骨も多くは前後端が砕けている。それらがぼつんぼつんと貝層中から検出された。何故このような状態で存するかはわからない。顎骨断欠八、それらの大部分から歯がぬけおちていた。それらの出土地点と資料を次にあげる。人骨に対しての調査は東京大学人類学教室に依頼中である。

地点	資料
H 3	上顎(右第二大臼歯・左第一小白歯残る)。頭骨片 上膊骨断欠二、前膊骨断欠一
J 4	上膊骨・前膊骨片・胸骨片 右下顎片
I 3	右下顎骨片(第二臼歯のところまで)、左下顎片(第三第四臼歯残る。第二門歯のところまで)、右下顎骨片(門歯より第一臼歯のところまで)
L 4	前膊骨片
C 4 (最下層)	膊骨片
C 3	尺骨二

不明	E 3			E 1	B 5
	貝層下	八層	六層		
膊骨片八、頭骨片三、下顎骨片一、蹠骨一〇	前膊骨片	膊骨片	大腿骨片	右下顎骨片 (第一小白歯残る)	膊骨片
				右下顎骨片 (門歯より、犬歯のところまで)	

魚類：貝層中のどの部分からも魚骨は多量に検出されたがその中で最も多いのはマダイの頭骨とマダイ・クロダイの顎骨であった。これは実に多量に存在し、洗い終った魚骨からこれらを分類してみたならマダイ頭骨六五〇個、マダイ顎骨五八〇個、クロダイ顎骨四〇〇に達した。破壊してしまったものを加えたら七〇〇以上のマダイ頭骨があったであろう。最大のものでは頭骨長七・五cmに及ぶものがあつたおそらく長さ一mに達する大ダイであつたらう。マグロの脊椎骨がまれにはあるが、サメの脊椎骨も時々検出されたが多くは今でも海岸で多くみるドジザメであるが中には狂暴性を知られるアオザメやネズミザメがある。入江中にまよいこんだ狂暴者の捕獲に大活劇が演じられたであらうと想像される。カンダイの咽頭歯がいくつも検出されているがその中に巾八・五cmに及ぶ巨大なものがある。どんなに大きい魚だつたらうか。

マダイ (顎骨・頭骨・脊椎骨)	コチ (顎骨)	キダイ (顎骨)
クロダイ (顎骨・脊椎骨)	カンダイ (顎骨・咽頭歯)	チダイ (顎骨)
スズキ (顎骨)	インダイ (顎骨)	カサゴ (雑骨)
マアジ (顎骨)	トビエイ (歯・尾刺)	イナダ (同右)
ヒラメ (顎骨)	ブリ (顎骨・脊椎骨)	カンパチ? (同右)
ボラ (雑骨)	マグロ (顎骨・脊椎骨)	カワハギ? (顎骨)
ハモ (顎骨)	カジキ (脊椎骨)	イトヨリ? (雑骨)
ハタ (顎骨)	ドジザメ (同右)	メバル (顎骨)
アオウミザメ (脊椎骨)	ネコザメ (同右)	カサゴ類 (同右)

ネズミザメ (脊椎骨)

鳥類…鳥骨は比較的少なく、その中ではカモメ類がわりに多い。ワシタカ類の猛禽類のツメと肢骨がみられた。ウミウのくちばしがE⁷貝層中から検出されたとき皆に見せたのであるが整理のときにこれのみあたらなくなっていた。

カモメ類	ワシタカ類	ハシホソカラス	カラスに近い属のもの	カモ
サギ	ウミウ	キジ	カモ・シギ類	

爬虫類…ウミガメの脊椎骨断欠が一例ある(註6)。

海胆類…貝層中からまれにムラサキウニの皮の断片を検出したが極めて小片である場合が多かった。

甲殻類…フジツボ・アカフジツボはしばしば貝層中から検出された。わられたのもあるが多くはそのまま大きいものも多い。何でも食った時代だからこれも食用にしたかもしれない。

花虫類…造礁さんごの一塊がある。長さ六cm、径四cmくらいの塊である。

糞石…四例ある。最大四cm。最小二cm。F・4・7・D・3・Eの下部貝層中から検出したものである。

自然環境の復原…貝塚を構成する貝及び出土の獣鳥骨から当時の自然環境を復原してみよう。現在の久里浜海岸のあたりを湾口とする奥深い入江の中程に北から突出した小半島が本貝塚所在地の台崎である。入江奥は佐原・大矢部・森崎・公郷・根岸・井田を結ぶ線あたりまで達していたであろう(註5)。その奥に大矢部・公郷・小矢部の湿地帯がつづくものであり、入江の水深は割合に浅いものであったと考えられる。当時の気候状態については明らかにすべき資料が少ないがハイガイが棲息していたことから考えると少なくとも現在より暖かかったものとすることができる。大楠山の北東裾の谷間にオウバノハチジョウシダ・オウバノアマクサシダ・アマクサシダ(註8)など暖地性のシダが残っていることや、旧入江の南岸をめぐる山にコシダ・ウラジロなどが点々と存在していること、三浦半島各地にアカガシ・ヤマモモ・フウトウカズラなどが自生していること、猿島にサカキカズラ・ヤナギイチゴ・ツクノキ(註9)など暖地性植物のあることなどによって、また、ハイガイが多かったこと、造礁さんごが採取されていることなどによってかつての三浦半島が今より暖地性気候であったろうことを裏書するものと考えられる。その原因と考えられることは黒潮の流れが今よりずっと本土に接近していたものであろうという考えである。暖流の及ぼす影響によって気候がより暖地的であったということは最も可能性の多いことである。現在の三浦半島丘陵の自然林をみると、シイ・カシ・タブなどが極めて多く、かつての三浦半島の自然

環境を物語るのもこれら植物であったと考えることができる。従って至るところにシイ・カシの木が群生していたから縄文人たちはシイ・カシの実を大量に採集することができたはずであり、保存食料としてこれが貯蔵されたと考えられることができる。クリ・ナラ・クヌギなど二次林として繁茂するものがどの程度存在したかは全くわからないが、あってもおそらくはシイ・カシ・タブの自然林の間にわずかづつ存在したにすぎないであろう。このような自然林に覆われた入江周辺の自然環境を頭に描きつつ、貝塚から出土したイノシシ・シカなどの大量の骨とアナグマ・タヌキ・キツネ・サル・イヌ・ウサギ・カワウソの骨とからそれらの動物が棲息していた自然を考えるのと縄文人の陸での毎日を想像することができよう。また、貝層から多量のイルカの骨の出土によって前面の入江にしばしば姿をあらわしたイルカの群にむかって丸木舟による攻撃を加える姿も目に浮んでくる。アシカやトドの歯の出土は寒流性の動物が東京湾にまでまぎれこむことのあったことがうかがわれる。入江内に突出した小半島の先端には岩礁が発達していたとみてよい。小半島と小半島の間には小入江があり、砂浜や泥砂の浜ができていたと考えることができる。彼らが貝を集めに歩いたのはそうした浜辺であったことが想像できよう。小半島先端の岩礁ではクロダイ・スズキ・カンダイがよくとれたはずである。釣人であった彼らはまた潜水の名人でもあったから岩礁の間にもぐっては泳ぎまわるそれらの魚をもりでもざしにすることは得意わざであったであろう。入江外の東京湾へもしばしば丸木舟を出して漁をしたことはマダイの大量出土によって知られよう。外洋性のマグロ・カジキ・サメなどもとっているがそれらも彼らのマダイ漁場である東京湾内にしばしば入って来たものと考えられることができる。外洋性のブリも三五月の産卵期には内湾に入ってくるから、東京湾からさらに前面の入江内にも姿をみせたであろう。鳥骨が少なくカモメ・ウミウなど今も東京湾内でみられる鳥のほかにはサギ・ワシタカ類が知られる程度であるのは彼らとしては鳥の捕獲は比較的困難であったためであろう。

文化遺物——土器：…下部貝層から採取された土器片は極めて多く二万五千片に及んだ。それらは縄文早期末に編年せられる茅山上層式土器に属するものであり、何れもが土質中に多量のせんいを混入するものであり、表裏に条痕のあるやや厚手の極めて破壊しやすいものである。従って発掘中細片になってしまうものまであった。文様あるもの少なく、文様のあるものも口縁部をめぐる部分にかざられていた。文様は沈線文・刺突文ハイガイ腹縁の庄痕文・縄文に分類せられる。それらの文様は極めて簡単な構成のものばかりである。土器面につけられた条痕が口縁附近では意識的に文様化しているものもみられる。茅山下層式土器にみられた胴部をめぐるバンドの尚残存するものもみられるがバンド上にはハイガイの脊文を押し込んだものがある。文様のあるものではバンドが沈線や刺突文に代って胴を一めぐりしている。文様を全く欠き条痕のみのものが極めて多い。全部が平底（あげ底）であり、中には極めて小さい底のものもある。口縁の酒杯状突起は小形になる。今回の調査で特記されるべき点は茅山

上層式土器に東海地方の早期縄文土器として知られた糟畑式土器が混出することである。これは貝層の最下部から最上部に至るまでみられた事実である。糟畑式は茅山上層式に似て表裏に条痕があるがセンイが少なくやや薄手であり、刺突文の列点が口縁に並行して二―三線めぐらされており、口縁突起は長楕円形（上面扁平）であり、底は尖底か又は極めて小さい平底である。貝層最下部から貝層下混貝土層にかけては茅山下層式が混出し、貝層下土層からは子母口式・田戸下層式・稲荷台式がわずかで出た。尚下部貝層真上の混貝土層からもセンイを多くふくむ条痕土器が出土しているが文様極めて稀であり、それらは茅山上層式と今のところほとんど区別することができないがこれには糟畑式を伴出せず、代って近江の石山貝塚にみられた入海（いるみ）式土器と全く同じ特徴をもつ土器が伴出する事実が明らかとなった。伴出する土器が違う以上、一見茅山上層式土器と同じにみえるこの層の条痕土器も恐らくは茅山上層式土器とはちがった性格をもつものと推察されるが資料が少なくその性格を明らかにするまでには至らないが編年上茅山上層式土器より新しい存在であることは誤ないものであり、今これを「吉井式土器」と仮称し、今後その性格の追求につとめる予定である。これらの土器については別稿「吉井城山第一貝塚の土器」（岡本勇氏）に詳述されている。

下部貝層と上部貝層との中間に存在する混貝土層からは前述のほか関山式土器を主としほかに諸磯b式土器・十三菩提式土器・阿玉台式土器を出しているがこれらは層位的には全く明らかでない。詳細な研究は未了であるから次回の報告にゆずる。上部貝層からは加曾利EⅡ式土器を出す。上部貝層については貝塚の項で述べた如くD³・E³・F³・G³と北方に次第に傾斜してきた貝層はG³において急に薄くなって終り、その延長は混貝土層としてさらに北方につづく（第一図版参照）。然るにG³において薄くなった部分で別の貝層がその上に薄く覆い、次第に厚くなり、さきの貝層のつずきであるかの如く北へのびているがそれは明らかにさきの貝層を覆うものである。従って両貝層中にある土器は一見同じく加曾利EⅡ式ではあるが明らかに先後関係にあるものである。さらにこの上を北するほど次第に厚く覆っている土層中にはやはり加曾利EⅡ式とみられるものが包含されているが、これは明らかに上部貝層の土器につづく時期のものであることは明らかである。これら三期の加曾利EⅡ式土器が全く同じものであるか、その間に何らかの違を示すかについては調査未了であるから次回の報告にまつ。尚この上部土層中からはほかに縄文後期に属する称名寺式土器・弥生式後期に属する土器・時期不詳の土師器が検出されている。

骨角牙器：…石器らしい石器にとほしく礫をうち欠きその稜を刃部として用いることを普通としていたような文化程度の低い茅山上層式の時期である。下部貝層ではおそらく獣骨を打欠いてできた自然の尖頭をそのまま骨器として使っていたであろうとの想像がめぐらされる。採取された骨角牙器の総数は三五〇に及んだ。断欠をつなぎ合すことのできたものも多いので個体数は三〇〇くらいになるであろう。それらはシカの角、シ

カ又はイノシシの肢骨、イノシシの牙などで作られ、トビエイの尾刺が使われたものもある。大多数は尖頭器に属するものであるが形を整えた石器が極めて少ないのくらべて整形された骨角器は意外に多く、釣針・針形・ペン形・鏝形があり、鹿角製打撃棒・棒状角製品・有飾骨器・ドーナツ形角器もある。尖頭器について概略をのべると骨片を割ってそのまま使用したものが多く、尖頭の磨滅によってそれが知られるほか尖頭又は骨片の一部を加工したものがあり、又全体に加工されたものもある。尖頭器の基部は肢骨の関節部をそのまま残して用いるのと骨片の基部を丸く加工したものもある。基部に細いすじ目をつけたものや入念な加工をしたものがあり、よく加工された尖頭では両側に等間隔に刻みを飾りつけたものもみられる。尖頭器はやや長いものもあるが多くは三―四cmの小形品が多い。釣針は何れも鹿角製。長さ六―七cm、巾四cmの粗製大形のものも多く、長さ三cm、巾一cmの小形でよくみがかれたものもある。何れにも先端にかえりはなく、もとには糸かけが作られている。完形品は少なく大部分断欠である。針形は最大一八cm、最小五cmのものもあるが一〇―一三cmが多い。完形品もあるが断欠が多い。糸かけ穴のあるものもあるがな多いものが多い。ペン形とよぶものは長さ六cm前後あり、ペン先の如く先がやや偏平となり、中には左右に張出しをみせるものもある。もとの部分も先に似たとがりをもつ。真直のものと幾分反っているものがある。これらは基部まで入念に加工されている。完形品が多い。これは真直なものと反っているものと数本組合せて一組のもりとしたものであろう。鏝形のものも割った骨の先をとがらしたものの先端部だけを折りとったようなもの。鹿角打撃棒は角座から第三枝の根元まである鹿角棒で第一枝は根元から切りとってある。角座を頭にすると極めて手ごろな打撃棒である。角座に近い第一枝の根元附近の側面に主軸と直角方向に打撃が加えられたあとを多く残すのが普通である。従来しばしば出土したが角器として検討されていなかった。棒状角製品は第三角区の部分又は枝の部分で結節がみえなくなるくらい削って棒状にしたもの。有飾骨器はよく整形された上に刻みつけたり、穴をあけたり、文様とみられる平行刻線を刻んだりしたもの。ドーナツ形鹿角製品は角座の部分だけを切りとり、周に刻みをつけ、中心に大穴をあけたもの。一種の垂身具であらう。牙製品としてはイノシシの牙を割ったものかなりみられたがそれらはそのまま刃器となつたと思われる。一例だが先と内側をすって加工した一種の大形組みあわせ釣針と思われるものがある。骨角牙器についての詳細は別稿「吉井城山第一貝塚の骨角牙器」(神沢勇一氏)をみられたい。

貝製品：…貝輪断欠七個とイタボカキの真中に丸穴をあけたもの一例があるほか大型―中型ハマグリ腹縁部に内面から外面にむかってトリミングを加えた一種の刃器がある。二四例検出されているから一般的用具であつたと思われる。同じようなものはバカガイ製四、カガミガイ製三がある。ミルクイの腹縁をかいたものが二例あるがこれは刃になつていない。

石器：…いわゆる石器としての形に作られたものは極めて少ない。藍閃片岩(?)製磨製石斧一、黒曜石製石匙二、石鏃七(黒曜石製二、玄武岩製四、頁岩製一)。石鏃は何れも二等辺三角形。五例は底辺が少し湾入しているが二例には湾入がない。比較的ぶ厚である。敲石・磨石はかなり多いようであり、形は普通みられる扁平楕円形の石けん形のものであるが何れも断欠である。石皿は何れも断欠。緑泥片岩製の一例を除いては何れも多孔質安山岩製。縁が凹石になったものもある。下部貝層からは頗る多量の礫がでているがそれらは破碎されたものが多く、破碎によって作られた鋭い稜が刃部として使われたものと考えられるが使用によって刃部が磨滅したものと刃部に刃こぼれのあるもの以外は使用したことを証することができない。しかしたたきさることを目的としたと認めることのできる礫刃はすこぶる多く検出された。礫刃の中には幾度も打欠きを加えて刃を作っているものもあり、刃部以外の部分にも調製を加えたものがみられる。これら充分な加工意識の認められる礫器を定形礫器とよび、特に加工されず、目的を達すれば足るとして使われた礫器を不定形礫器とよび區別する。これらの中にはひききる目的にしたと思われる長い稜に刃こぼれを残すものもみられる。鹿角などのひききりに使われたものであろう。黒曜石・玄武岩・ホルンフェルス・頁岩などの緻密な礫から打欠いてとられた剝片がかなりあり、それらは薄く鋭い刃部がすべて使われたものと考えられるがそのため刃こぼれを残す少数のもの以外は使用したものとする証がない。骨角器などに穴をあけたものがあるから穴をあける用途の尖頭器があった筈だがまだ石錐の製作はされなかったらしいから上記の剝片中の尖頭部分があるがほとんどものには全く何の痕も残されていない。しかしこれらの礫片は堅いことと多孔質という特性から二―三磨滅痕を認めるものがあるがほとんどのものには全く何の痕も残されていない。しかしこれらの礫片は堅いことと多孔質という特性から「やすり」と同じような役目に使われたと考えられる。多くの骨角製品の製作には欠くことのできないものであったであろう。実験結果からは骨角製品の製作には極めて有力な道具であり、しかもほとんど磨滅が目だたない。礫刃のほかに打撃することを目的としたため磨滅痕を残すものや打痕を残すものもかなり多く検出された。長手の礫をぼきんと折るとスタンプ状のものができる。これはものをつきくだくのに使われたと思われるがそのため周に打滅痕や剝片の落ちたあとを残すものがある。比較的やわらかい岩片に打痕や打撃によるくぼみのできたものがある。それらは台として使われたものである。石器についての詳細は別稿「吉井城山第一貝塚の石器」(赤星)をみられたい。

その他：…凝灰岩製の長楕円形舟形容器が一個出土している。それは全体が黄土色と丹色とに変色し、ぼろぼろに変質している。それが長時間火中されたものであることは一見して知られる。長時間火中する必要のある道具として丹の製造に用いられた一種の「るつぽ」であろうと推察する。下部貝層からは貝に附着した丹が幾例も検出されており、本貝塚人が丹をもっていたことは明らかである。土器に塗られたものは一例もない。

が骨器に丹色の残るものは認められた。彼らが裝飾に丹を用いたであろうことは考えられる。その丹を彼らが製造したと考える根拠は多孔質安山岩製石皿断欠の内部多孔質部分に丹がかたく残存するもの、多孔質安山岩礫の尖頭部分に丹の固着するもの、丹をすりつぶしたとみられる円礫のあることなどである。丹は酸化第二鉄であり、これは水酸化第二鉄を熱することによって得られる。水酸化第二鉄は沈澱褐鉄鉱としても水沢地であった土地などに残存する。高師小僧とよばれるものはその代表的なものである。これ入手して長時間焚火中で熱すれば丹は得られる。それを石皿でたたきつぶし、円礫ですりつぶせば粉状の丹となる。箱根山あたりの火山から天然の丹を採取して使うこともあったろう。丹についての詳細は別稿「吉井城山第一貝塚の丹について」(赤星)をみられたい。

五、結 び

茅山上層式土器の性格を追求する目的で開始した吉井城山第一貝塚の調査はたまたま埋立工事に伴う貝塚の切崩に遭遇し、ほとんど完掘に近い大発掘を行なうことができた。ぼう大な量になった遺物の整理はとうてい短日月でできるものではないが事情あって極めて急がねばならなかったから下部貝層についての研究とその報告の執筆とを強行したが、調査結果は極めて良好であり、茅山上層式土器の性格を明らかにできたばかりでなく、これが槽畑式土器を伴うという予想外の事実をつきとめることができた。骨角牙器についても、石器についても、従来全く不明であった早期縄文末文化を具体的にすることのできたことは近來にない快報である。縄文早期にすでに丹の存在することはわかっていたが彼らがそれをどのようにして作ることができたかは考えられていなかった。それが諸種の遺物の出土によって明らかにせられたことも快報の一つである。茅山上層式土器を出した下部貝層を覆う混貝土層中に入海式土器を伴う茅山上層式土器とほとんど区別できない条痕を主とする土器の存在が指摘せられた。この土器は、茅山上層式土器の後に編年さるべきものであることがわかったがその性格は全く不明である。吉井式土器と仮称し、今後追求さるべきものとして問題を提起することができた。これらの資料をありきたりの調査報告で済ますことはとうていできないので重要な各項目については別稿に独立したものとしての形をとり、ここには概要を記すにとどめたものである。中間層以上の研究については本研究報告第七号に執筆せられる予定であることを附記する。

- (1)、怒田城については源平盛衰記「衣笠合戦のこと」に記されており、その構造については『三浦半島城郭史 上』（赤星直忠）横須賀市博物館刊、昭和二十九年、に記されている。
- (2)、赤星直忠「浦賀町沼田城山横穴について」考古学雑誌第三十二巻第四号、昭和十七年四月
- (3)、赤星直忠「浦賀町吉井横穴」考古学雑誌第二十四巻第五号、昭和九年
- (4)、赤星直忠「三浦郡吉井貝塚調査」史前学雑誌第九巻第六号、昭和十二年
- (5)、獣魚鳥骨の鑑定は早稲田大学の直良信夫文学博士をわずらわしたが先生は現在健康を害しておられるため、この大量の骨片全部に眼を通していただくというわけにいかないので筆者が大体の分類をしたものを見ていただいたのであるがそれでも数時間を費し尙残量が相当であるに至った。本稿も先生の健康が許せばおねがいしたいところであったがそれは無理とわかったので先生の分類されたのをもとにして書いた。
- (6)、貝塚発掘中及び資料整理中応援に来た金子浩昌氏によって自然遺物の一部が分類された。
- (7)、三浦半島の縄文文化期における低位置遺跡をみるに三浦市南下浦町上宮田小学校前遺跡は砂丘上にあり、現地表より一・三m下に土器包含層があり、諸磯C式・五領ヶ台式・阿玉台式土器を出土する。この層の標高は約5mである。横須賀市内川新田小字丸畑の遺跡（横須賀市博物館より明浜小学校校庭にわたる地域）は地表下〇・三mの砂中に土器包含層がある。茅山上層式・諸磯C式・阿玉台式土器などが極めて粗に埋没しており、中心部を知ることができない。おそらく砂州上の生活跡であったがしばしば波におそわれているらしく、汀線すれすれの低位置遺跡と考えられ、標高約3mである。これによって考えると当時の海水面は今より3mくらいしか高くはなかったとしなければならぬ。
- (8)、田中すぎ子「大楠山附近の羊歯分布」昭和三〇年二月、謄写刷。
- (9)、横須賀市博物館大谷茂氏の教示による。
- (10)、横須賀市博物館研究依託、堀越増興氏の御援助をうけた。

吉井城山研究史

	調査研究	時	発表文献
1	怒田城地形		源平盛衰記
2	土器・磨石斧採集（八木装三郎）		人類学雑誌一〇一号
3	三浦郡浦賀町吉井貝塚		日本石器時代人民遺物発見地名表 第四版（大正六年）
4	第一貝塚試掘（赤星）	大正十年	
5	吉井城山北接地の二横穴調査（赤星）	昭和八年	赤星直忠「浦賀町吉井横穴」考古学雑誌第二十四卷第五号（昭和九年）
6	第一・第二・第三貝塚のほか北方に中期縄文土器散在地あることと、第三貝塚下方畑にも遺物散在することを知らる	昭和十年	赤星直忠「茅山貝塚と吉井貝塚」神奈川県史跡名勝天然記念物調査報告第五輯（昭和十二年）
7	第三貝塚発掘（赤星）	昭和十一年	赤星直忠「三浦郡吉井貝塚調査」史前学雑誌第九卷第六号（昭和十二年）
8	京浜急行電鉄工事により城山西崖切崩され横穴発見により調査（赤星）	昭和十六年	赤星直忠「浦賀町沼田城山横穴について」考古学雑誌第三十二卷第四号（昭和十七年）
9	第一貝塚一部発掘（横須賀郷土文化研究会）	昭和二十三年	
10	城跡構造調査		赤星直忠「怒田城」『三浦半島城郭史（上）』（昭和三十三年） 横須賀市博物館刊
11	城山西半部切崩されたので第一貝塚を調査した（横須賀市博物館）	昭和三十五年 同三十六年	横須賀市博物館研究報告（人文科学）第六号・第七号（予定）